

ロックの空間概念について

後藤愛司

On the Conception of Space in John Locke's ((An Essay concerning Human Understanding))

Aiji Goto

RESUME

In this paper, I try to analyze the conception of Space which was written in the chapter XIII, book II, of ((An Essay concerning Human Understanding)) by John Locke, and put it into the confrontation of various theories in the 17th century.

As the result of this analyzation, the following issues would be revealed.

1. In his ((Essay)), John Locke does not admit both the relative conception of Space and the absolute conception of it.
2. In his critical analysis of Descartes' theory, the method of scepticism is adopted.

1. 17世紀における空間、時間論

A) 17世紀は、近代の力学的世界観が成立した時代である。そして、この力学的世界観成立の根底には、自然把握の最も基礎的な概念としての、空間と時間に関する学説の独特の展開があった。だが、この力学的世界観をになった形而上学者達、あるいは科学者達が、皆一致して一つの立場に立っていたわけではない。

現在、我々が、この時代の空間、時間に関する学説をふりかえって見る時、そこには、二つの代表的な立場が見られる⁽¹⁾。

一つは、Newtonに代表されるような、絶対的空間、絶対的時間を認める立場である。彼は、物質あるいは一切の外的事物と無関係に、均質で不動の空間と、外的世界とはかかわりなく均一に流れる持続としての時間を考えた。

他方、Leibnizは、空間を、同時に把握される事物の存在の秩序と考え⁽²⁾、時間を、事物の継起する順序と考えて、事物との相関関係を重視する、いわば、相対主義的空間、相対主義的時間を主張した。

又、Descartesは、Leibnizとかなり近い立場で、空間的延長と物質を同一視し、物質をはなれた空間はありえないとする、延長即物質論をとく。時間論においても、絶対的時間を認めず、いわゆる、連続的創造説⁽³⁾をとり、持続の部分の相互非依存を主張している。

このような、大きく分けて二つの時間、空間論の対立を念頭において、John Lockeの空間論を考

察するのが、この小論の目的である。

B) 周知のように、Locke は『人間知性論』(An Essay concerning Human Understanding) において、Descartes の批判者として、大きな姿をあらわしている。したがって、彼は、Descartes 的空間論に対する徹底した批判者である。しかし、彼は、その反対者たる Newton と同じような、絶対的空間の立場をとったのであろうか。たしかに『知性論』の中には、Newton 的な絶対空間を認めているかのように見られる発言もしばしばある。しかし、彼は一方で、Newton 的な自然科学的知識の成立の根拠を否定しており、絶対的空間概念に近い立場を表明する場合でも、一定の留保をつけたままである。

何よりもまず、彼の『観念学』という構想自体、自然に関する物的考察 (physical consideration) を排除しているのであり、彼の時間、空間という概念は、あくまで、観念としてのそれだからである。

したがって、17世紀における時空論の対立の中では、Locke は、明白に、一方の立場にだけ組してはいない。それが、Locke の思想の曖昧さとなり、彼の哲学に対して、「経験論への不徹底性」とか、「合理論と経験論の分裂」といった批判がなされる場合と同様、時空論に関しても、混乱した image が、今なお、つきまとっている。

私は、結局、この問題は、先にのべた、「合理論と経験論の分裂」といった言葉で表わされるものと同根であると予想しているが、この小論においては、判断の妥当性の問題をあつかった『人間知性論』第四部はあつかわないので、Locke の合理論的側面は、今後の課題として、あとまわしにする。

したがって、ここでは、彼の「経験論的側面」の性格を、彼の「空間論」の中から摘出して、一定の評価を与えたいと思う。そしてできれば、Locke の観念学的方法の背後にかくれている、彼の基本的発想を明らかにしたい。

2. Locke の観念学の体系の中での「空間論」の位置

A) Locke は『人間知性論』第2巻13章から15章にかけて、空間と時間(持続)について述べている。その直前の12章は、複雑観念 (complex idea) 全体の見取図を提示している章であり、そこにおいて、時間及び空間は、単純様相 (simple mode) として、複雑観念の冒頭にもってこられる。

Locke の複雑観念は、単純観念を知性が結合したものであって、それは、様相 (modes)、実体 (substances)、関係 (relations) の三つに分類される。そして、様相は単純様相 (simple mode) と複雑様相 (mixed mode) にわかれ、単純様相の中で、空間、持続、数 etc. が考察される。

この分類において、空間、持続(時間)は、複雑観念の中の様相であって、しかも単純様相であるということになる。つまり、複雑観念の一部だということになる。

しかし、一方、『人間知性論』第2巻5章において、「さまざまな感官からの単純観念」(simple Ideas of divers Senses) として、空間ないし延長を単純観念に含めている。

空間観念を分類する上での、こうした矛盾は、Locke 自身気付かなかったわけではない。彼は、2巻13章において、これを「単純観念の変容⁽⁴⁾」(Modification of any one simple Idea) とはっきり定義し、2巻15章においては、「空間も持続も単純観念に数えて正当である⁽⁵⁾」と述べているからである。

また、『人間知性論』第4版で付加された叙述によれば⁽⁶⁾、彼は、上述の分類以外の観念学の構想を持っていたかのようである。

この第4版の付加の中では、単純観念に対して、その力能をはたらかす心の働きは三つに分けられる。

- ① 単純観念を複雑観念に構成すること。
- ② 単純であれ、複雑であれ、観念間の関係をとらえること。
- ③ 抽象によって一般観念を作りあげること。

このように、単純観念から、より複雑な観念の成立がいかにしてなされるかという問題意識は、確かに、第3版までの分類と、第4版での付加とでは、位相がずれてきている。

できあがった『人間知性論』全体の構想を見わたしてみると、第4版での付加の方が、実は、彼の本来の意図に近い。とくに、第3巻『言語論』の存在意義を考えてみた時、第3版までの分類からは、いらざるつけたしとしてしか考えられない。だが、第4版付加における構想にたてば、観念学の最も中枢に位置する章として、第3巻がうかびあがってくるのである。

しかしながら、第2巻全体の叙述の順序は、第3版の見取図にしたがっている。つまり、叙述の場所としては、複雑観念の内におかれるが、内容的には、これは単純観念の変容であって、単純観念として、とりあつかわれている。

こうした矛盾が存在するということは、Locke自身の不明瞭な叙述にも責任があるが、同時に、様相 (modes) という概念の二重性の問題が背後にある。

B) この様相という概念は、Lockeの時代のイギリス哲学界では、ほとんど使われない概念であった。大陸においては、Descartes以後Spinozaなどによって広汎に使用されたが、イギリスでは、Lockeが、おそらくはDescartesから学んで、自己の観念学に導入したものである。

Lockeはmodesを次のようにのべる。

First, Modes I call such complex Ideas, which however compounded, contain not in them the supposition of subsisting by themselves, but are considered as Dependences on, or Affections of Substances;⁽⁷⁾

つまり、様相は実体に依存しており、そのかぎりでは、様相は実体の様相だとするのである。これはDescartesと同じ定義である。Spinozaの場合、実体は神だけであるから、Descartesの実体の位置に属性がくるので、属性の様相ということになる。

大陸の合理論では、特にDescartesの場合、実体は延長と思惟の二実体という形で、形而上学全体の根幹として、最初に前程される。しかし、Lockeの場合、実体はそのようなpriorityを持っていない。

まずLockeの実体観をとり上げよう。

感覚あるいは内省からくる単純観念は、個々バラバラに心の中に来るのではなく、一定数が、絶えず一所に現われる。この集合としての単純観念は、ある主体に合一され、一つの名で呼ばれるが、実は、「単純観念の複雑体⁽⁸⁾」(complications of many ideas)である。この複雑体は、次のようなかた

ちで、実体という概念と結びつけて考えられる。

Because, as I have said, not imagining how these simple Ideas can subsist by themselves, *we accustom our selves, to suppose some Substratum, wherein they do subsist, and from which they do result, which therefore we call substance*⁽⁹⁾.

ここでは、単純観念の複雑体が実体と結びつけて考えられるのは、*accustom our selves to suppose* ……という言葉であらわされるように、「想定するように自ら習慣づけている」にすぎず、支えるもの (support) としての実体そのものについては、我々は明晰な観念を持っていないのである。

---Which Support we denote by the name Substance, though it be certain, we have no clear, or distinct Idea of that thing we suppose a Support⁽¹⁰⁾.

そうすると、この Substance というものは、ただ、まとまった単純観念群を成立せしめるために想定されたにすぎない操作概念に他ならず、実体に依存する様相という定義づけは、様相の真の定義にはならない。

そこで、Locke は、自分がこの様相という概念を一般とは違った使い方をしているといいわけをする。

And if in this I use word Mode, in somewhat a different sence from its ordinary signification, I beg pardon; it being unavoidable in Discourses, differing from the ordinary received Notions, either to make new Words, or to use old Words in *somewhat a new signification*, the latter whereof, in our present case, is perhaps the more tolerable of the two⁽¹¹⁾.

ここでいう *somewhat a new signification* が、先に述べたような、「単純観念の変容」(Modification of simple Idea) という定義づけである。つまり、様相が、実体というただ想定された観念、混乱した観念⁽¹²⁾ (the supposed, or confused Idea of Substance) と結びつく側面を強調せず、様相が単純観念の集成であるという側面を前面におし出す。この結果、同じ種類の単純観念が変容したものが単純様相、いくつかの種類の単純観念が集成されたものが混合様相とされ、単純様相の中に、時間(持続)、空間は含まれるのである。

そこで厳密に言えば、混合様相は、いくつかの違った観念の集成であるから、複雑観念の中にも含めてよい。しかし、単純様相は、同じ種類の単純観念の変容であるから、単純観念の内に含めるべきとも、考えられる。

3. Locke の空間論の分析

A) 空間の単純観念は、視覚あるいは触覚を通してうけとられるものであるが、単純様相になると、この空間が変容したものとなって、距離 (Distance) とか、延長 (Extension) とか、形 (Figure) とか、場所 (Place) とかが、その中に含まれる。

最初に、Extention をとりあげ、それと Locke の Descartes 批判との関係を考察しよう。

第2巻13章3節において、彼は延長 (Extension) を次のように定義づけている。

The term Extension is usually applied to it (Space), in what manner soever considered⁽¹³⁾,

非常に漠然として曖昧な定義であって、ほとんど無意味だといってもよい。しかし、これは第4版の叙述であって、第3版においては次のようになっている。

When considered between the extremities of Matter, Which fills the Capacity of Space with something solid, tangible, and movable, it is properly called Extension. And so Extension is *an Idea belonging to Body only*⁽¹⁴⁾;

ここでは、物体にのみ属するものとして延長が述べられているが、先に述べた第4版のような変更が後になされたにもかかわらず、13章27節、あるいは15章1節においても、同様の主張が第4版になって変更されず残されている場合がある。つまり、Lockeは、Descartes的な延長概念を最初は持っていたわけであるが、後に論ずるはずのDescartes批判の過程の中で、この概念の重要性が希薄化して、第4版のような変更におちついたらしい。

しかし、彼はDescartes的な定義づけを完全には捨てきれず、Locke独自の延長概念を、Descartesのそれと対比して、広がり(Expansion)という別の言い方で表わすことになる。

Distance or Space, in its simple abstract conception, to avoid confusion, I call Expansion, to distinguish it from Extension,...⁽¹⁵⁾

このExpansionという概念は、ついに市民権を持つにいたらなかったが、彼のDescartes批判の中から、すくいだされた独自の延長概念なのである。

では、Lockeは、Descartesの延長概念に対して、どのような態度をとったのであろうか。

B) Lockeによれば、Descartesの立場は、延長=物質説である。

There are some that would persuade us, that Body and Extension are the same thing⁽¹⁶⁾;

Descartesは、延長と物質の区別は概念的な区別であって実在的な区別ではないとする立場に立ち、延長とは数学的对象としての属性であり、物体は物理学的対象としての実体であって、属性と実体の関係である以上、事実上は何ら区別する必要はないと考える⁽¹⁷⁾。このことで、物理学を幾何学によって根拠づけようとしたのである。従って、当然、空虚(真空)という物体のない空間(延長)は、彼の自然観の中から排除される。同時に原子論も排除されてしまうのである。

Lockeの場合は、物体の本質を延長だけに限定しない。彼によれば、物体は延長と固性(Solidity)を持っている。したがって、固性という、Locke独自の単純観念を媒介にして、物体は延長と区別される。

この時、LockeのDescartes批判の方法が大変おもしろい。

And if it be a Reason (reasoning) to prove, that Spirit is different from Body, because Thinking includes not the Idea of Extension in it; the same Reason will be as valid, I suppose, to prove, that Space is not Body, because it includes not the Idea of Solidity in it; Space and Solidity being as distinct Ideas, as Thinking and Extension, and as wholly separable in the Mind one from another⁽¹⁸⁾.

論敵であるDescartesの論証方法(Reason)を持ってして、Descartesの矛盾を明らかにするという巧妙なrhetoricである。ところが一方で、彼は自己の固性概念を論証することも、またしていない

のである。つまり、固性とは何かという問に対して彼は次のように答えているからである。

If any one asks me, What this Solidity is, I send him to his *Senses* to inform him: Let him put a Flint, or a Foot-ball between his Hands; and then endeavour to join them, and he will know. If he thinks this not a sufficient Explication of Solidity, what it is, and wherein it consists; I promise to tell him, what it is, and wherein it consists, when he tells me what thinking is, or wherein it consists; or explain to me, what Extension or Motion is, which, perhaps, seems much easier⁽¹⁹⁾.

つまり、誰でも感官 (Senses) を通して、つまり経験によって、知る以外にないとするのである。もし、その以上の論証が必要なら、まず、そちらから先にどうぞというわけだ。ここでも、彼は、敵の武器を奪って切りかえしている。こうした Locke の論証方法を、私は後にもう一度とり上げることにするが、明らかに、これは、懐疑論者のやり方である。

C) したがって、Locke は、物体からも、固性からも区別された純粹空間を認めることになる。純粹空間とは真空のことであるが、これは次のような規定を持っている。

- ① 固性とは区別された観念であるから、物体の運動に対する抵抗を含まない⁽²⁰⁾。
- ② 純粹空間は、部分に分離できない。部分的考察は可能であるが、分離はできない⁽²¹⁾。
- ③ 純粹空間の部分は運動できない。部分に分離できないからである⁽²²⁾。

このような規定を持った純粹空間 (真空) は、やはりここでも、Descartes の真空否定論とぶつかる。

Descartes の真空否定の論拠は、次のような論法によると Locke は考えている。

Those who contend that Space and Body are the same, bring this Dilemma. Either this Space is something or nothing; if nothing be between two Bodies, they must necessarily touch; if it be allowed to be something, they ask, whether it be Body or Spirit?⁽²³⁾

答は当然 Spirit ではないから、やはり、結論としては、空間が物体で満たされることになるというのである。珍しくもない Parmenides の論法である。しかし、この議論では、存在か無か、精神か物質か、という二分法が前程されている。この二分法を認めないならば、議論全体がなりたたなくなる。そこで、Locke は、答える。

To which I answer by another Question, Who told them, that there was, or could be nothing, but solid Beings, which could not think; and thinking Beings that were not extended?⁽²⁴⁾

ここで、使われる rhetoric もまた、相手の論理の前程そのものに含まれる独断論的思惟を明らかにする懐疑論的反論である。

しかし、この Descartes 学説に対する反論は、消極的な反論にすぎないので、Locke の提示する純粹空間の仮説は、同様に、Descartes 派からの反論が成立することを予想させる。この反論と再返答とを二つとりあげよう。

- ① If any one ask me, What this Space, I speak of, is? I will tell him, when he tells me what his Extension is⁽²⁵⁾.

② If it be demanded (as usually it is) whether this Space void of Body, be Substance or Accident, I shall readily answer, I know not: nor shall be ashamed to own *my Ignorance*, till they that ask, shew me a clear distinct Idea of Substance⁽²⁶⁾.

一見して明らかだが、これは懐疑論者の意見である。

懐疑論は、一切の独断論的言明に対して、それに対立する言明を提示することで、判断保留にいたらしめ、その結果として、平静悟脱の心境にいたろうとするものである。ためしに、Sextus Empiricusによれば、懐疑主義とは、次のようなものである。

Le scepticisme c'est la faculté d'opposer les apparences (ou phénomènes) et les concepts de toutes les manières possibles; de là nous en arriverons, à cause de la force égale des choses et des raisons opposées, d'abord à la suspension du jugement, puis à l'ataraxie⁽²⁷⁾.

Locke が懐疑論者であるとすれば、Descartes 的な意味での実体の観念、偶有性の観念は、独断論者の迷妄である。彼は自らの無知 (ignorance) を誇りをもって宣言してもかまわないのである。

だが当面のところは、Locke が懐疑論的方法をもって、Descartes の物質即延長論を反駁したことを明らかにしておけばよい。

問題は、Locke が、Descartes, Leibniz にみられるような、事物との関係を離れない相対的な空間の立場をすてて、Newton 的な絶対空間の立場に立っていたのかどうかということである。

D) Locke の空間概念が Newton 的な空間概念と対比的にあつかわれているのは、場所論においてである。

Newton の空間は絶対空間であり、一切の事物とは無関係に、均質で不動の場所であり、感覚的事物との関係を持たない。したがって、絶対空間の中の絶対的場所が、場所であるということになる。

それに対して、Locke は場所の相対性を主張する。Locke の定義は次のようである。

... So in our Idea of Place, we consider the relation of Distance betwixt any thing, and any two or more Points, which are considered, as keeping the same distance one with another, and so considered as at rest; for when we find any thing at the same distance now, which it was Yesterday from any two or more Points, which have not since changed their distance one with another, and with which we then compared it, we say it hath kept the same Place.⁽²⁸⁾

つまり、場所 (Place) とは、静止すると考えられるある地点からの距離であって、この静止点をどこにとるかによって、場所は、相対的に変化する。これを、彼は、航海している船の上の船室の中におかれた、チェス盤上のコマの位置の例で説明する。静止点を、チェス盤におくのか、船におくのか、海におくのかで、場所の観念は違って来る。したがって、宇宙の部分については、場所の観念を持つが、宇宙そのものの場所の観念を持つことはできない。つまり、絶対的空間の観念を我々が持つことは不可能だというのである。その理由は、場所そのものの定義からくる。

... because beyond that (the Universe), we have not the Idea of any fixed, distinct, particular Beings, in reference to which, we can imagine it to have any relation of distance; but all beyond it is one uniform Space or Expansion, wherein the Mind finds no variety, no marks⁽²⁹⁾.

ここでも、純粹空間としての Expansion は、論証不能である。人間の精神の能力の限界を超えるからである。

以上のことから明らかなように、Newton 的な絶対空間は、Locke の純粹空間と同じものではない。人間の知性の起源を感覚と内省に限定する Locke の立場からいって、感覚を離れた、観念的絶対空間は認められないからである。

E) それでは、Descartes 的な延長即物質論でもなく、Newton 的な絶対空間論でもない Locke の空間概念の特徴は何であろうか。その一つは真空の存在を認めるという点である。

もし、経験論的な立場のみを一貫させるならば、絶対空間という想定を否認するのは当然だとしても、真空そのものを、何故にかくも擁護しなければならないのか。真空に対しても、彼の常套論法である懐疑論的方法を使って、否認はせずとも、判断保留ぐらいはしてもよいのではなかろうか。

しかし、Locke は、あくまでも Descartes 的な真空否定論には反撥している。それは、Descartes 主義が、物質をあまりにも重視しすぎるという理由である。物質重視を極限までおしすすめれば、それは唯物論になり、彼は Descartes の背後に、それを認めるからである。たとえば、Descartes が物質=延長を実体とする点に対して、彼は次のように述べる。

If so, whether it will not thence follow, That God, Spirits, and Body, agreeing in the same common nature of Substance, differ not any otherwise than in a bare different modification of that Substance; as a Tree and a Pebble, being in the same sence Body, and agreeing in the common nature of Body, differ only in a bare modification of that common matter; which will be a very harsh Doctrine⁽³⁰⁾.

神と精神と物体を、同じく実体とすることは、結局、物質的世界を神の位置に近づけ、唯物論へ至るという危惧を感じさせるからである。Locke の見る所、Descartes は、次のように、物質無限論にならざるをえないのである。

The truth is, these Men (Cartésians) must either own, that they think Body infinite, though they are loth to speak it out, or else affirm, that Space is not Body⁽³¹⁾.

物質無限論になっていけない理由は何か。それは宗教上の理由である。物質に対する神の力能を否定することになるからである。

Farther, those who assert the impossibility of Space existing without Matter, must not only make Body infinite, but must also deny a power in God to annihilate any part of Matter⁽³²⁾.

この論述に続けて、Locke は、神の全能を認めるならば、宇宙に静止をもたらす力能、物質を消滅させる力能を、神に認めなければならないと述べる。そして、一旦、宇宙を静止状態において、その一部分を消滅させれば、その消滅させられた部分は真空となるだろうと推論する。Locke の真空の証明は、結局、すべて神に帰着するのである。

そうすると、Locke の空間は、神学的、形而上学的空間として定立されたのであろうか。そういう解釈も確かに可能ではある。が、よく考えてみると、彼自身は、このような空間概念を、他の独断論者達に対立し、論破するためにのみ持ち出しているのであって、自ら積極的に神学的基礎づけを主張

してはいない。

その証拠の一つは、次のような叙述である。

But the Question being here, whether the Idea of Space or Extension, be the same with the Idea of Body, it is not necessary to prove *the real existence* of a Vacuum, but the Idea of it;⁽³³⁾

彼は、空間の *real existence* を自らの考察の範囲外におくという限定をつけることで、相対空間にも、絶対空間にも反対しながら、神学的思弁にのめりこむことを自ら禁じ、自らの「観念学」の範囲を逸脱しようとしなない。

しかし一方で、彼は、先にのべたように、護教論的意図を持っていたのであるから、その側面を拡大して解釈すれば、様々な研究者達が Locke の背後に Henry More の影を見たのも無理はないと思われる。

だが、『人間知性論』の中では、彼は、そうした神学的思弁へのめりこむ誘惑を感じながらも、人間の知性の限界内に、かろうじて踏み止まっていたように、私には思われる。

4. 結 論

以上のような Locke の空間についての考察から出てくる結論は次のような事柄である。

① Locke は当面の論敵として Descartes を選んだが、その場合、彼は、Descartes 的な物質即延長論の背後に、実体概念を前程とする形而上学的独断論を見ている。

これに対する Locke の立場は懐疑論的判断保留である。

② 物質と空間を同一視する視点を排除しながらも、彼は、Newton のように、空間の絶対性を認めない。空間の絶対化も、また一つの独断論だからである。

そして、場所論におけるように、人間の知性にとっては、空間は相対的であるという主張を強調する。

③ したがって、通常いわゆる、絶対空間対相対空間の対立は、Locke においては、主要な対立ではない。

④ Locke における固性の強調は、物質対象が人間の感覚にとって確実でなければならないという要請に基くと考えられる。

したがって、彼は、感覚の中にあくまで人間知性の起源を求める感覚論の立場を守る。

⑤ 純粹空間(真空)の存在の根拠は、知性の内からは出てこない。この点は判断保留がなされる。そして、あえてその根拠を求めるとすれば、神学上の判断から、護教論的意図を持って、神の力能によって根拠づけられる。

※ ※ ※

したがって、Locke の立場を方法論的にみれば、近代懐疑論の方法が踏襲されているように思われる。

懐疑論は、認識の不確実性を証明することを主張しているが、その場合、認識が感覚をとおしてなされるということは、事実として、前程されている。(特に古い層に属すると見られる10の方式)つま

り、認識そのものは不確実かもしれないが、たとえ、それらが不確実であったとしても、認識が感覚に依存するという事実だけは確実である。

もっとも、懐疑論は、感覚と思惟の二つの源泉を認めている。だが、この二者の関係は、互に相対的であり、無限背進、あるいは循環論の方式によって、根拠を剝奪されてしまう。したがって、感覚知の相対性が懐疑論的思惟の中核なのであり、感覚知の確実性の根拠への不断の探究こそ、懐疑論の目ざすものであった。

Sextus Empiricus などにみられる懐疑論が、感覚論から認識の不確実性へという方向を持っていたとすれば、Locke の問題意識は、感覚論から認識の確実性へという方向である。つまり、懐疑論者によって不確実とされた感覚知を、確実なる認識にまで練り上げることが、Locke の『観念学』の主題であったといってもよい。

周知のように、Locke の方法は、「歴史記述の平明な方法⁽³⁴⁾」(historical, plain method)であって、「物性的考察⁽³⁵⁾」(physical consideration)は最初から排除されている。物性的考察の確実性の根拠は、彼の懐疑論的方法においては、どこにもないからである。したがって、感覚をとおして現われる限りでの空間の観念は認められるにしても、物性的考察にかかわるような空間の実在的観念については、判断保留しなければならない。強いて、これを認めるとすれば、それは、人間の知性を超えた存在者としての神によって基礎づけるより他にないのである。

懐疑論的思惟が常に判断保留にとどまるとは限らない。「不合理ゆえに、我信ず」という信仰の真理にむかって飛躍する場合もありうるのである。

注

- (1) 『講座・現代の哲学(1) 時間・空間』総論。村上陽一郎 参照。
- (2) Leibniz, Clarke 往復書簡, 第5書29節 邦訳『ライプニッツ論文集』(春秋社, 昭24) p.87
- (3) 『哲学原理』, I, 21.
- (4) An Essay concerning Human Understanding edited by Peter H. Nidditch, Oxford, 1975 II, 13, §1, p. 167
- (5) ibid. II, 15, §9, p.201
- (6) ibid. II, 12, §1, p.163~164
- (7) ibid. II, 12, §4, p.165
- (8) ibid. II, 23, §1, p.295
- (9) ibid. II, 23, §1, p.295
- (10) ibid. II, 23, §4, p.297
- (11) ibid. II, 12, §4, p.165
- (12) ibid. II, 12, §6, p.165
- (13) ibid. II, 13, §3, p.167
- (14) ibid. II, 13, §3, p.167
- (15) ibid. II, 15, §1, p.196
- (16) ibid. II, 13, §11, p.171
- (17) 九鬼周造 『西洋哲学史稿』上, p.113参照。
- (18) ibid. II, 13, §11, p.172
- (19) ibid. II, 4, §6, p.126~127

- (20) *ibid.* II, 13, §12, p.172
- (21) *ibid.* II, 13, §13, p.172
- (22) *ibid.* II, 13, §14, p.173
- (23) *ibid.* II, 13, §16, p.173
- (24) *ibid.* II, 13, §16, p.173
- (25) *ibid.* II, 13, §15, p.173
- (26) *ibid.* II, 13, §17, p.174
- (27) *Les Esquisses Pyrrhoniennes ou Hypotyposes* traduit par Geneviève Goron, Aubier, 1948 I. §4, p.158
- (28) *ibid.* II, 13, §7, p.169
- (29) *ibid.* II, 13, §10, p.171
- (30) *ibgd.* II, 13, §18, p.174
- (31) *ibid.* II, 13, §21, p.176
- (32) *ibid.* II, 13, §21 [bis] p.176
- (33) *ibid.* II, 13, §23, p.178
- (34) *ibid.* I, 1, §2, p.44
- (35) *ibid.* I, 1, §2, p.43

(1980. 10. 1. 受理)